

## 岡村昭彦が生きていたら2014

### むのたけじさん、金子隆一さんの講演

#### 第29回AKIHIKOの会開催



今年のAKIHIKOの会は三月二十九日(土)東京都写真美術館(目黒区)で開かれました。岡村昭彦が逝って二十九年、来年は没後三十年になります。七月十九日から同美術館で岡村昭彦写真展―生きること死ぬこと―が開かれるのを前に、全国から岡村さんの縁に連なる九十二名の人たちが集まりました。

講演の最初は同美術館学芸員で写真史家の金子隆一さんによる「岡村昭彦…写真の技法」。

金子さんは写真展開催へ至る経緯を話したあと、「岡村の写真は近代的な写真美学で見ると下手と切り捨てられるかもしれない」としたうえで「岡村昭彦がいう証拠力の強い写真というのは、強烈なイン

パクトのある写真と真逆な位置にあって現実にかけている事実をすべて写し取る写真」と岡村の写真を使いながら説明しました。

続いての講演は、むのたけじさん。明治百年を足場に岡村昭彦との緊迫した対談(『1968年歩み出すための素材』)は今でも多くの人に読み継がれています。阪神淡路大震災直後の一九九五年、没後十年目のAKIHIKOの会では「まだ眠るなよ、岡村昭彦!」という演題でした。そして今回はそれから十九年ぶりです。演題は「昭彦君が生きていたら」。

むのさんは、講演の冒頭で「岡村昭彦を罵ります」と言い、青山斎場での告別式のことを話し始めました。弔辞で「昭彦のばか野郎。嘘つき。言ったことと、やることが違うじゃないかと叫んだが、今そのときと同じ激しい気持ちだ。昭彦のばか、なんでおまえは早く死んだのか、この爺さまが九十九年と三ヶ月も生きていたのに、十四年遅く生まれたおまえが、五十六年でくたばるなんて」と、遺影に向かって語りかけました。

そして二〇〇一年NY貿易センタービルで起きた爆破事件について「岡村昭彦が生きていたらアルカイダのミスター・ビン・ラディンに会見たらどうだろう。それが出来たのは岡村昭彦だけだ」と話しました。講演のあとは、それぞれ金子さん、むのさんに会場から質問が多くあって、時間を気にしつつ名残惜しく会を閉じました。

その後、懇親会が恵比寿ガーデンプレイスグラススクエアのメルカート・デラ・パスタで行われ、五十二名の方が残って親交を深めました。

# 岡村昭彦

## 写真の技法

かねこ  
金子  
隆一  
りゅういち  
(写真史家)



ただいま、ご紹介いただきました東京都写真美術館の金子隆一と申します。今日は、東京都写真美術館で岡村昭彦の写真展を開催することになった経緯についてと、それから「岡村昭彦——写真の技法」と題した私なりの岡村昭彦の写真をどう見るのかというお話をさせていただきますと思います。

まず、東京都写真美術館で岡村昭彦の写真展開催に至る経緯についてお話をさせていただきますと思います。

そのことについては、FJJI XEROX が出しているPR誌『GRAPHICATION』No.185で、アイルランドの写真を中心として、「岡村昭彦が残したもの」という特集で触れております。

冒頭にAKIHIKOの会の世話人米沢慧さんと写真家中川道夫さんの対談、そしてジャーナリストの吉田敏浩さんの「我々はどんな時代に生きているのか」。それから「岡村昭彦文庫について」静岡県立大学の比留間洋一さん。そして写真史研究者で、今回の展覧会で中心的にいるいろやっていたいでいる戸田昌子さんが書いていて、そこに私もコラム的な形で「岡村昭彦の写真展の開催について」というものを寄稿させていただきました。

今日皆さんにお配りしたものは、今年の一月にプレスリリースという形で、新聞社とか、出版社の編集の方に配ったものでございます。現在「岡村昭彦の写真——生きること死ぬことすべて——(仮称)」と小さく「仮称」と書いてあるのですが、まだ最終的な館全体のコンセンサスがとれておりませんので、まだ「仮称」が付いています。開催は今年の七月十九日から九月二十三日までで決定です。

東京都写真美術館は、一九九二年に岡村昭彦の写真二十八点を収蔵しました。その時窓口になつていただいたのが今日お見えになつている岡村春彦さんです。岡村春彦さんに「日本人が撮ったベトナム戦争という枠組みの中で、その第一弾として岡村昭彦を収蔵したい」とお願いに行き、二十八点収蔵をさせていただきました。

私がそのときに企画したのは、「日本人が撮ったベトナム戦争」でした。それこそ沢田教一や嶋元啓三郎、秋元啓一、一之瀬泰造、石川文洋など幅広い収集を考えていたのですが、岡村昭彦や沢田教一、秋元啓一、中村梧郎ぐらいまでやったところで、実は収集予算がなくなつてしまい、残念ながら頓挫しました。

それから十数年経ち、二〇一〇年に戸田昌子さんを通じて、岡村春彦さんの手元に残っているカラーポジフィルムを中心とした岡村昭彦の写真原板を写真美術館に収蔵できないかという打診がございました。それで実際にどんなものがあるのかということで、岡村春彦さんのところへ行き、とりあえずお預かりして調査するということになりました。

それは何故かといいますと、東京都写真美術館では、印画紙にプリントしたものを写真作品として収集しますが、写真原板、つまりネガフィルム、ポジフィルムについては基本的に収蔵

していないからです。

そこで調査ということでお預かりしてきたのですが、その後、実際には調査も遅々として進まずといった状態でした。

ところが、ちょうど運よくというのもおかしいですが、それでも、東京都写真美術館は今年の九月末から、リニューアルの為に二年ほどクローズします。

たまたまリニューアル前にやる予定だったあの企画が流れて、急遽岡村昭彦の写真展を提案したら館でコンセンサスが得られたのです。それで個展という形で開催が決まったわけです。

実際にポジファイルをクリーニングして新しいファイルに移し替えたり、出てきたメモとかを整理したりする作業は、戸田昌子さんと中川道夫さんのお二人が中心になってやってくださいました。その調査に約二年間、厳密にいうと、一年半ぐらいでしょうか。ようやく今回展覧会開催までこぎつけることができたのです。

今日、これから私がお話をさせていただく岡村昭彦の写真については、まあ言ってみればその調査中に岡村昭彦の写真を実際に見て、岡村の写真はこういうふうに見える、こういうふうに見ていくと凄く重要なものとしてもう一度見直すことができるという、そういう気づきを得ることができたのでそのことをお話ししたいと

思います。

私は写真の歴史、特に日本の大正時代、戦前の昭和、戦後の昭和三十年代ぐらいまで。そういう時代の写真を研究することを専門として、この東京都写真美術館をベースに仕事をさせていたいております。

調査のなかで、岡村昭彦の写真はいわゆる写真として良いとか悪いとかということでは評価できないということが分かってきました。

現在、東京都写真美術館では三万点ぐらいの写真を収蔵していますが、収蔵にあたっての選考では写真として良い悪いということが一つの基準になるわけです。それは言い方変えると芸術、アートとしての写真という言い方をしたほうがいいかもしれません。

大きい流れとしてニュース写真、学術写真、科学写真なども、いわゆる芸術的な面から見て位置付けてゆくということについては、大体一九三〇年代の後半から行われはじめ、そして六〇年代の末から七〇年代に確立をしたと言えると思います。

たとえば、科学写真。カエルのレントゲン写真だとか、パロマ山天文台で撮った星雲の写真だとか、科学実験や天体観測の結果ですが、それでも、そこに新しい美を見出し、そしてそ

れを風景の美しさ、人物の深さの表現などと、同等に位置付けてゆくという動きがありました。事実、東京都写真美術館でもニュース写真や科学写真も集めております。いわゆるネイチャーフォトといわれるものはそれにあたると言ってもいいかもしれません。

それらの写真を言ってみれば美しいとか、かたちがいいとかで収蔵するのです。

そのような動きは一九四〇年代にアメリカで始まりました。ニューヨークの近代美術館は写真部門をつくって、写真を収蔵し、写真というものを近代芸術の一分野として体系づけることをやります。ここ東京都写真美術館、東京国立近代美術館も同様であるといっているでしょう。もちろん、シカゴ美術館やロバート・キャパの弟が運営している国際写真センター、パリのボンピドー美術館もその枠のなかにあると言っても言い過ぎではありません。

言ってみれば、写真の評価というものがそういう枠の中にある、ということを是非、ご理解をいただきたいと思えます。

そういう枠の中で、岡村昭彦の写真を、どのように見ていくのか、ということが実は私にとってはとても重要な問題であるし、それが写真美術館でやる、展覧会の一つの意味でもあるのかなと思っております。

つまり写真というものをどのように理解してゆくのかということ。そのことの新しいきっかけを岡村昭彦の写真は与えてくれるのではないかとというのが、今回展覧会をやるうえで、私自身が一番の興味でもありますし、いまこうしてお話しするなかでの興味であります。

岡村昭彦の写真について、いろいろな言い方がされているということは皆さんもご承知だと思います。その一番多い言い方って何かと思いますと「岡村昭彦は写真が下手だ」と言うことです。私もそれを言われると、うん、確かに下手だよ、と思ってしまう。それは、私が持っている先ほど言った近代的な写真美学というものに則る限りにおいては、それは下手だ、ということになります。じゃあその下手だ、という事の中で岡村昭彦の写真というものを切り捨てることのできるのか。また、そういうふうにしてしまったときに、私たちは見失ってしまうものがたくさんあるのではないかということでもあります。

岡村昭彦は写真についていろいろなことを言っております。

一九六二年、岡村昭彦が香港で買った一台のライカM3を持って、バンコクに行つて、PANNAの中国人の社長に「フィルムの入れ方が俺わか

らないんだ」と言ったということは神話と書いてもいいくらい有名なお話だと思います。

それに対して岡村は「私はカメラの扱い方は知らなかったけれども、何を撮ればいいのかということを知っていた」と。つまり、カメラは何を撮るかということの一つの手段に過ぎないということであるわけですよ。

土門拳との話の中でこんなことを岡村は言っております。『わたしの知的生産の技術』という本に収められた「世界史のしっぽを捉えるまで」という講演の一部ですね。

土門さんのお伴をして、大阪港の港湾労働者を撮影されたときの事です。土門さんに岡村はこう聞きます。「なぜカメラ雑誌に作品を発表される場合、カメラの型やレンズ、それからフィルムの種類や撮影のデータまで添え書きされるのですか」。すると「別に書く必要はないのさ。本当のことを書いてやったからといって、アマチュアカメラマンが、プロのように撮れるわけではないんだ。それなのになぜ書くんだって？ データを書いておいてやらないと、アマチュアの人は眠れないからだよ」と、土門さんが岡村に答えています。

岡村昭彦は本当にどうでもいいと考えていたのか。私はどうもそうではないのじゃないかと思うんです。カメラやレンズとか、広い意味で

の写真撮影の技術について、確かに無手勝流で岡村はそれを体で覚えてきたということはあるけれど、実にそれを周到に使うことが出来た写真家ではないのかと見たときに、岡村の写真の意味がもう一つ見えてくるのではないかと思います。

「昭彦さん、手段で迷っているときは目的がはっきりしていないからですよ」というこの言葉は、岡村昭彦のお母さんの有名な言葉で、私も肝に銘じたい言葉だと思っています。

岡村はこの母の言葉を、ベトナムの戦場でも南、西アフリカのブッシュの中でも、アイルランドのパブでも、常に自分の中に反芻する言葉と言っています。つまり何をやるべきか。それは写真で言えば、何を撮るべきか、ということに收拾、収斂すると言っていると思います。

そこで岡村は写真をどのように考えていたのかということについて、先の「世界史のしっぽをとらえるまで」から岡村の言葉の引用です。

報道写真という歴史のジャッジに耐えうる証拠力が要求される記録写真では、まず撮影するカメラマンの目的がはっきりしていなければなりません。その為に、撮影のテクニクよりも、シャッターを切る以前のカメラマンの思想がその人の写真そのものを支配してしまいます。

「シャッター以前」という言葉に象徴されていると思います。岡村が書いているのを読むと、「どういふふうに撮るか」という技術的な問題ではなくて、何を撮るかという目的がはっきりしていれば大丈夫と読めなくもありません。岡村昭彦はもう少しそのことについて具体的に、証拠力の強い写真とは何か、ということについて、こう述べています。

写真というものは、伝達の記号としては万能ではない、と考えている。それは文字の可能な限界と音の可能な限界と写真の可能な限界を弄りながら、それぞれの可能な限界を掘り下げてゆることが、記録としての写真の可能な限界を深めるというのが私の基本の考え方になっていきます。一言で、一口で言ってしまうえば、私は報道写真というものは、証拠力の強い写真を撮ることだと思っています。では、この証拠力の強い写真というのは、どういふふうに出てくるのか、ということではないでしょうか。

その中で岡村昭彦はこう言っています。

私は35ミリプラス105ミリのレンズを主体とするカメラマンで、それは私の背の高さ、顔の形、相手が拒否できない笑い顔、対象に接近する能力と速さなどを加味して決めたものなのです。私が基本とするレンズは3

5ミリでそれを105ミリで補うというカメラマンということになります。

35ミリというのは、俗にいう広角レンズ。105ミリというのは望遠レンズということになります。例えていうと35ミリは片目を瞑って見える範囲。105ミリは普通我々が見ているものの二倍の大きさで見えるものです。

岡村はいわゆる50ミリを標準レンズというのは真つ赤な嘘だ。標準は、あらかじめ決まっているものではなく、写真家が何を撮ろうとするかによって決まるのだというのが岡村の主張です。



そこで事例を示しながらそのことについてお話を進めていきたいと思います。スライドをお願ひします。これは

ベトナムサイゴンのアメリカ大使館前の爆破事件の時の写真です。これは、見てもすぐわかるのですけど、いわゆる広角レンズで撮っております。次、お願いいたします。



これは画面が真四角です。岡村昭彦はライカを使うだけではない、画面が真四角に撮れる二眼

レフ、恐らくローライフレックスのカメラを使っていたと思われます。これは多分、それを使った写真だと思えます。

ローライフレックスでカラーフィルム。六〇年代のカラーフィルムの感度は今の半分以下ですからシャッタースピードが遅くなる。絞りは明るくしなくてはいけない。そんな中でこれが撮られている。岡村昭彦はこの初期において、このカメラを結構使っています。

次、お願いいたします。



これも同じくローライで撮った写真です。ローライフレックスには80ミリという焦点

距離のレンズがついていて、普通にこのぐらいの距離感でピントを合わすと、この背景はピントがぼけてしまいます。これは仕方がないので。機能ですから。この兵士とこの子供のところは非常にクリアにピントが合っているのがお分かりいただけると思います。つまり、ピントが合っているところと合っていないところが写真の中に不可抗的に入ってきてしまう、そういうカメラなのです。

ではなぜ岡村は使ったのかといいますと、この当時ネガにしる、ポジにしる、原板のサイズが大きくなると日本では使ってもらえないというところもあったのではないのでしょうか。つまり35ミリのカラーポジでは印刷原稿に堪えないというのが日本の習慣でした。アメリカはそうではなかったのですけれども。もしかするとそ

ういうことを意識しながら、こういうカメラを使っていたのだと思います。

第二次世界大戦においては、多くの写真家がこの二眼レフを戦争の現場に持ち込んで写真を撮っていたということがありますので、特別なことではありません。ここで私が言いたいことは一つの画面にピントが合うところと合わないところが明快に出てきてしまうことです。次、お願いします。



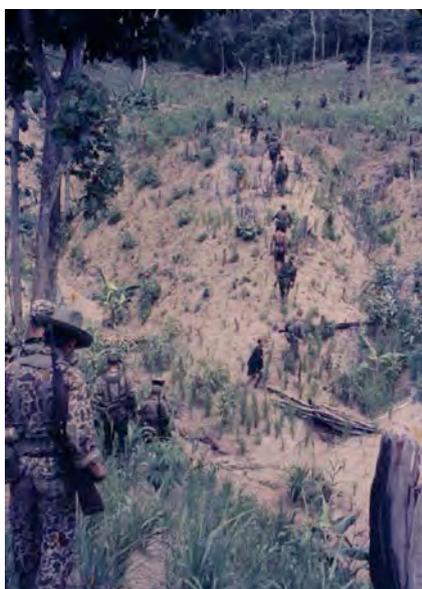
この写真を見るのと、このジープのところの兵士の死体はピントが合っているけれど、私たちはピ

ントがボケている。この、ロクロク(6×6)の画面は真四角です。現在わたしたちは真四角の写真を雑誌などで見ることは特別なことではありませんが、この一九六〇年代の半ばにおいては、この真四角の上を切るとか、横を切るとかして細長くしてページにレイアウトする、そ

ういうことが自由自在に出来るフォーマットであるという意識がありました。

岡村はなるべく奥までピント合わせようとしているのですけど、これが限界ですね。そうすると仮に上を切ってしまうと、全体的に隅から隅までピントが合っていることになる。つまり、岡村が見たことが、すべてピントが合っているということなるわけです。ところが、実際には、このフルトリミングで見ると限りにおいては、ある部分はピントが合い、ある部分はピントが合わないという世界ですから、トリミングすると演出されてしまう。

岡村自身は、この写真の処理の仕方をもろろん受け入れているとは思いますが、そういうふうな初期の岡村の写真は、まだまだ未分化なところがあつたのではないかと思います。次、お願いします。



私はこの写真を見たとき、岡村はこういうふうに写真を撮るんだと思いました。これは恐らく105ミリの望遠レンズ、もしかしたら200ミリかもしれません。

これは望遠レンズで兵士が山奥をあがっているところを撮っている。ここからかなり距離があるはずですよ。手前にこれだけ人がいるんですから。でもここにピントが合い、ここまできっちりピントが合っています。

岡村昭彦にとってすべてのものにピントが合っているということはとても重要なことだと私は思っています。35ミリのレンズは、ある程度絞り込むと、約1mから遠くの青空まで全部にピントを合わせることができる機能を持っているので、35ミリのレンズを使うと岡村は言うていますから。

それに対して望遠レンズは人の顔にピントを合わせれば後ろはボケるんです。ところが、うんと絞り込むことによって、望遠レンズを使いながら、すべてにピントが合う。

ということ、岡村が見ようとしているものは、一人の兵士でもなく、草叢だけでもなく、またフォトジェニックな、そういったイメージの世界でもなく、まさにその目の前にある全てのものを等しい価値をもつもの、この世界を構成するものとして見ようとしていることではな

いか。そのような態度が、この写真から見てとれるのではないのでしょうか。

次、お願いします。



今度は広角レンズなんですけれども、全体的にピントがあっているということがお分かりいただけると思います。ダイナミックに人の正面を撮っているわけですが、岡村はこの自転車の船先から向こうの山まで全部を写し撮る。こういう写真を撮っていたのは六〇年代においては珍しいと思います。

つまり写真は強烈なインパクトのある、衝撃的なイメージを伝えるものです。すると自分が一番伝えたい部分だけをクローズアップして他を全部捨てれば、よりインパクトが強くなるわけです。それは写真学校でもごく普通に教えています。より衝撃的な写真、言ってみれば売やすい写真を撮るといふ言い方にもなりましょ

うか。そういう写真を撮るための一つの方法として教育されています。

岡村は、全く逆の方向を最初からやっています。必要なものは全部入れてゆく。全部入れることによってしか、世界は成立しない。つまり世界で、無駄なもの一つもないという考え方であろうと思います。写真のなかでそれを排除してしまつたら、写真は世界と等しいものとして、相照らすことができないことではないかと考えていたのではないかなという気がします。次、お願いします。



これは  
タヒチ  
です。ね。  
フランス  
の航空母  
艦。実は  
望遠レン  
ズで撮つ  
たもので  
す。  
望遠レ  
ンズで、  
手前は多  
分地元タ

ヒチの人でしようか、大きい空母とこの人とのバランスを望遠レンズを使うことによって巧みに表わしていると思います。そういうことを可能にするレンズとして、この105ミリのレンズというのはとても都合のよいレンズであったと思います。

次、お願いします。



実はこれも望遠レンズで撮っています。つまり距離感を持つことによって、その場を捉えることができる。ここにいろいろさまざまな人。つまり

これ確かドミニカだったですよ。人がまるでお人形さんのように立っています。いろんな風体の人が見え、岡村の方を見ているんですけど、いろいろ見えて、

一人の人間で何かを象徴させるということは岡村の方法ではない。何かを証拠立てるといふことは具体的なことでしかないのです。写真は常に具体的なものを写し出しています。抽象的なものはひとつもありません。白い壁を撮って、何も写っていない、白い壁が写っているはず。空気が写っていると僕よく言うんですけど、写真は具体的なものをベースにして成り立っているものだと思います。

次、お願いします。



のはより小さく、そういう特徴があります。

これも35ミリの広角レンズで撮っている感じがあまりしません。つまり広角レンズの特徴は手前のものはうんと大きく、遠くのもの

手前にあるものは大きく、遠くにあるものは小さく描く西洋の遠近法はそういうものですが、写真もそういうヒエラルキーをつくり出す。岡村はそれを技術的にやっていたのではなく、自分が撮りたいものをちゃんと示すためにはこういう撮り方をすることから、編み出されてきていることは間違いないと思います。

次、お願いします。



これはアイルランドです。これもその広角レンズで、すべてにピン트가合っている。このことは写真の歴史の中でもとても大切な

ことです。いわゆる35ミリ判の小型カメラがでてくるということ、もつと直接的に言えば、ライカと

いうカメラが一九二五年に登場して可能になっていった世界と言っても言い過ぎではないと私は思っています。

すべてのものにピントが合うということ、つまりすべて物がはつきり見える世界が写真の本質であるとは思っています。そうしたときにこの、岡村のこの撮り方は、まさに必要なものはその中に取り込んでいる写真ということができると思います。ただそこで写真のインパクトの強さは引算だという言い方をしましたが、それからすると岡村の写真はインパクトが弱く見えてしまいますよね。

次、お願いします。



これは望遠レンズで撮っている写真ですが、この手前の女の子とこの兵士たち、その後ろの建物、一方通行の矢印とか、すべてにピントが合っていると岡村の思想が読みとれるの

ではないでしょうか。言ってみれば岡村という人は写真の世界と現実の世界の違いをとてよくわかっていたのではないかと思いました。

写真が周りを全部捨て去って、悲しい顔を一つポンと出してしまうこと。表情の中にすべてのことを象徴してしまうことの怖さ。それを一番よくわかっていた写真家が岡村ではないでしょうか。

いまの多くの写真家は、その悲しい表情をいかに撮るか。言ってみればいかに泣かせるか。そこに賭けているといってもいいかもしれません。岡村は見る人を泣かせません。

次、お願いします。



これは広角レンズですけれども、岡村の写真の特徴というのは、この写真は建物や群集を単にこの一つの全体のイメージとして試してみようのではなく、ここに一人ひとりを見つめて

いくと、あたかも私たちがその場において目を動かしていくような、そういうふうにするという事です。

私たちは写真を見たときに一つのイメージとして受け取ってしまって、その表情を読むみだいなことになってしまいます。岡村はそうではない。その場、その空間そのもの、現実そのものの中に人がどのようにいて、そして物がどのようにあり、そしてそこで何が起きているのか。またこちらでは何が起きているのか、何が起きていないのか。そういうようなことすべてを一枚の写真の中に撮ろうと思っています。

ですから、岡村の写真はいろんなものを含みすぎているから、インパクトもないし、いわゆるメッセージ性というものが弱いんです。

ところが、メッセージというものの一番の怖さということを知っているのが岡村も含めて戦後の報道写真家だと思えます。それはなぜか。第二次世界大戦のなかにおいて、いわゆる報道写真という名のもとに、国策プロパガンダが行われていったのです。

それに対しての危惧を持っていたのが土門拳であり、それから名取洋之助であるといっているのだと思います。

岡村の言う、証拠力の強い写真というのは、

別な言い方をすれば、決してプロパガンダにならない写真、というふうにして私はつけ加えたと思います。それが、証拠力が強いということのもう一つの意味ではないでしょうか。

そういう中であつていま、この岡村の写真というものをもう一度見るといふことは、写真というものがそういうところに落ち込んでいかないために何をしなければならぬか。また、岡村がわれわれにいったい何を見せようとしたのか。また、世界史というものがいったいどういうものであるのかということも少しでも読み解いていければいいと思っております。

この七月十九日から始まる展覧会の中で、岡村昭彦の世界観が見えてくるように私も頑張つていきたいと思ひますし、そういうところでは非みなさんに岡村の写真を見に来ていただきたいと主催者の一人としてお願いいたします。

今回の展覧会には未発表がたくさんあります。その未発表というのは、戦争写真という枠ではなく岡村が生きてから死ぬまでの全ての写真の中からセレクトしたものです。岡村が生きてきた世界がどういふものであるのかということを理解するための手掛かりになるような展示構成ができたらいいなと思っております。ご清聴有り難うございました。

## 【略歴】

一九四八年、東京生まれ。立正大学文学部卒業。写真史家、東京都写真美術館学芸員。写真集収集家としても著名。東京総合写真専門学校非常勤講師、武蔵野美術大学非常勤講師も兼任。日本写真史、特に日本の芸術写真（ピクトリアリスム）研究における泰斗。東京都写真美術館の展覧会の企画・運営や国内外の様々な写真展を企画し、協力をしている。芸術写真に限らず、写真史のその他の分野にかかわる著作も多い。共著に『The History of Japanese Photography』、『日本写真集史 1956—1981』等、編著に『植田正治—私の写真作法』等。職業は僧侶

## ▽佐藤純子(昭彦長女)さんからのメッセージ

皆様 今年も直接お会いできずにとても残念です。函館は三月に入り大雪となりましたが、今は積雪もゼロとなり、群青色の海も少しずつ明るさを増しています。津軽海峡のむこうに見える大間も美しく、このまま穏やかな風景がいつまでも続いてほしいと思っております。

ニュースに流れました、陸前高田の映像は三年過ぎても、まだまだ復興とはほど遠いように感じられました。昨年二〇一三年一月三日に父の友人、当別トラピスト修道院のシメオン高橋正行神父様が永遠の世界に旅立たれました。前夜まで普通に過ごされていたとのこ

とでした。今でも宗文堂にいつものように「純ちゃんさ」と現れそうです。一九三一年（昭和六年）一月一日東京本所生まれ、父と二歳違いの神父は「昭ちゃん」友達だから」といつもおっしゃっていました。

「さらば函館」と北海道を後にした父昭彦、一九五三年当時代理院長を務めたトマ高島神父、那須からの帰路「帰り来し、雪の津軽の修道院」と詠んだ高橋神父。三人で津軽海峡を眺めながら話しているかもしれせん。今月三月一六日〜一七日にかけて金子隆一さん、中川道夫さんが函館へ来てくださいました。トラピスト修道院へも一緒に来ました。父が客室係としてすごした建物も今はありませんが、同じ静けさと佇まい、凛とした空気が流れていました。窓から見える景色は今も昔も変わらないと思います。ただ今年中にトラピスト修道院前のポプラ並木市道が石畳風舗装になるそうです。父が残した資料も見てくださいましたが、あまりに膨大な量で戸惑い気味のようでした。

父の写真展がこんなに早く開催されるとは思いませんでした。驚きと感激、多くの感謝でいっぱいです。

春彦さんの知人から「昭彦さんは不思議な方で、亡くなってから段々と輝いていくように思います。このパワ―はどこから来るのでしょうか。元気で写真展に伺いたいと思います」とのお葉書をいただきました。

七月一九日からの五六日間、どうぞ皆様、会場へ足を運んでくださいますよう、重ねてお願いいたします。ありがとうございます。

二〇一四年三月二九日

函館 佐藤純子

# 昭彦君が生きていたら

## むのたけじ

(ジャーナリスト)



むのたけじと申します。つい先日までは、聞いて下さる方が五〇〇人ぐらいまではマイクなしで、できれば立って講演してきましたが、このように車イスにすわって講演することになりました。今日で二度目ですが、ごめんなさい。背の小さい俺がすわると後ろの人が見えないだろうから高くしてくれって言ったたら、「その方

が危ないからやめろ」と言われてしまいました(会場笑い)。私の姿が見えなくても、声は奥まで聞こえますか?(会場「聞こえます」それじゃ、話を始めます。

さつき岡村昭彦さんの写真について勉強させていただきました。なるほどと思いました。わたくしは、生身の人間・岡村昭彦を語ります。今日ここで、講演してほしいという連絡を、息子が事務局の方から受け取り「お父さんどうする?」と聞かれたとき、私はすぐに「ああ、するよ! 必ず行くよ!」と返事しました。講演の申込にこういう返事するのは最近の私にはないことです。「ぜひ行く、必ず行く」と返事した理由は、もういつ死ぬか分らない歳になったから、昭彦さんに別れの挨拶をしようと思っただけです。

ところが、死んだ昭彦さん相手に喋ったって何の意味もありませんね。その言葉を生きている方々に聞いてもらって、それが生きている方々の人生の営みに何かプラスになり、同時にここから何かが生まれて欲しいという祈りを込めて語ります。

何を言うか。まず、昭彦を罵ります。青山斎場でお弔いがあったとき、私は弔辞を述べる気持ちも、注文もないし、何にも準備しないでただ霊前に供える香典を私としては破天荒の金額

を用意して行きました。そしてその後で岡村春彦さんが多すぎるからと、横手の家までわざわざ芸術の甕を持って来ましたかな。

あのときあの会場におられた皆さんはご存知の通り「むのさんに弔辞お願いします」と言われたので「はい」と言って「昭彦の馬鹿野郎! 嘘つき! なんだお前!」と怒鳴ったのです。「俺に言っていたことと、やったこと全部違うじゃねえか、馬鹿野郎!」。後で何人かの人が私の所へ来て「あれでやっとお弔いになった」(笑い)と言ったが、それと同じ激しい気持ちを、今、言いたいんです。

「昭彦の馬鹿! なんで早く死んだ。俺より十四年も遅く生まれてきて、この爺さまが九十九年と三カ月も生きてるのに、六十歳にもならずにくたばるなんて。あまりオナゴ遊びすぎたからでねえか」(笑い)。なぜか。彼は死んではいけなかったのです。ぜひ生きていて欲しかった。何をやる為に生きて欲しかったかということこれから話します。

私は昭和十一年に東京の専門学校を出て、新聞記者になってから足掛け八十年、ジャーナリストと言われる仕事を続けてきました。その中でもう考えるだけで体が燃えてくるのは何かというと二〇〇一年九月十一日のニューヨーク

のビルディングがぶつ倒されたあの日の出来事です。あの日私はたまたま東京の近くへ講演か何かで来ていてテレビを見ました。あの時テレビの国際報道では、イスラム教徒のテロリストの仕業のようなことを喋っておりましてけど、ジャーナリストの私はすぐに疑いました。

これは違う！ これはアメリカの大統領の謀略ではないか。あの大統領はブッシュ！ ジュニア。親父も大統領。あれの謀略ではないかと疑いました。なぜならば、私の勉強したイスラム教徒の歩みの中からは、ああいうことを世界相手にやるというのは考えられません。アメリカがアメリカ自体を救うためにやったのではないかと思っただけです。なぜか。

ご存じの通り一九世紀の初め一八二〇年代にアメリカでは第五代モンロー大統領がモンロー主義といわれる外交政策を打ち出すのです。アメリカ大陸の中における、いわゆる合衆国とラテンアメリカ系住民との問題について、ヨーロッパは口出しするな、ヨーロッパの列強はアメリカ大陸へ利権を求めてくるな。その代わりに、アメリカもヨーロッパへは出かけて行かない。そういう自らを閉じ込めるような外交政策を打ち出して、以来約二〇〇年。いろいろな曲折はありますが、アメリカは世界へ口出しをしてこなかったのです。

ところが、二〇世紀の一九三〇年頃、アメリカの権力にも、民衆にも、アメリカは世界のナンバーワンだという奢り高ぶった気持ちが芽生えてきて以来、アメリカは何かにつけて、アングロサクソンの嫡出子として、アジアの問題、ヨーロッパの問題へと出かけてきております。そういう流れの中で、いろんな矛盾をアメリカ自身が抱え込んできておりますね。

例えば、アメリカでは、もう二〇世紀の初め頃から、産業規模が大きいため、四％の失業者がいることは、いざ必要だといふときの産業予備軍として健康な状態だ。そこから、五、六、七％となれば、アメリカ経済は破綻すると、経済学の一つの法則のように語られるほど、アメリカ経済が世界の情勢と結びつくようになって以来、アメリカは徐々に世界へ口出しをするようになっていった。

私は新聞記者になって勉強しましたが、ジャーナリズムの元の言葉となるジャーナルとは日記です。日記は今日こういうことがありましたと書くことです。それに「ISB」を付けたジャーナリズムは、今日あったことが、前の日にはどうだったのか、明日はどうなるか。原因、プロセス、結果のこの流れを突き止めながら、やがて何が起こってくる、その流れを伝えるのがジャーナリズムだと学びました。

今の日本の新聞社、放送局、出版社が出しているものの八五％はただのトピックスで、こういう流れを伝えるものではありませんね。今日は暑かった、雨だった、事故が起こったというトピックスだけ。放送局は八五％休んでいればいい。一五％しか意味ない、こういう状態になっている。

そういうことにならないために私は、若いときから、何か関心持った出来事があると、ありとあらゆる記事を寄せ集めて整理して、スクラップブックをつくって、その出来事がニュースから消えるまでとことん追跡して状況分析をしてきた。そうするとアメリカの失業率が七％に達すると、必ず世界のどこかで戦争状態が起こるといふのが分かって来た。

大東亜戦争というのは、明らかに旧中国満州に対する侵略が始まって、中国本土まで踏み込んだ日本の侵略行動だったに違いありませんけれども、それを誘発する世界情勢はアメリカにあったわけです。

そういう点を考えてみたときに、あのニューヨークのビルディングがぶつ倒れたあの出来事が、アメリカ自身がすでに展開してきたブッシュの親父の時代からやってきたイスラム教徒を敵対視する政策の矛盾の辻褄合せから起こした謀略行動ではないかという疑問を私が持ったわ

けです。

アメリカへ旅行したときにいろんな人の話を聞きましたが、アメリカ人の歴史学者も含めて半分は「むのさんと同じ疑問を持っている」と言いましたよ。

第一次世界大戦、第二次世界大戦のような過ちを世界人民が繰り返すことなく、第三次世界大戦を防ごうとするならば、ジャーナリズムが生きかえらなければなりません。あのニューヨークのタワー倒壊事件の真相は何なのか。ジャーナリズムはこれを確かめなければなりません。ブッシュの言うようにアルカイダのビン・ラディンという男の指示なのかどうなのか。その男に会って確かめればいいでしょ。「あなたが指導者だと言われるアルカイダという組織は何ですか」と。

「アルカイダ」というのはイスラム語で英語ならば、ザ・ベイス。基地だそうですね。直訳すれば基地だけど、あれはイスラム教徒の神学校。イスラム教を布教する宣教師の子を育てる初等科、中等科、高等科の基礎を教える初等科を意味する言葉だそうですね。

そのビン・ラディンという男が、ブッシュの言うように、世界中の人々を恐怖に陥れるような乱暴なやり方をなぜするのか。もし彼がやったとすればですよ。彼に会って、なぜやったのか。

どうしたらそれをやめるのかということインタビューして、世界中の人々に伝える責任が本物のジャーナリズムだと私は思います。

そのとき、私はもう九十歳近くでした。自分じゃやれない。どこかがやるだろうな。きっとこれはやるはずだ。二一世紀の最初の年に起ったこの出来事を、世界中のジャーナリズム産業が見過ごすはずはない。どこだろう。ドイツ、イギリス、アメリカ。どこかがやるだろうなと待っていました。どこもやりませんでしたね。

そのときに誰もやらないとすれば、第二次世界大戦で大きな罪を犯した日本からこの世界の危機の真相を暴く本物のジャーナリズムの行動隊が出るはずだと思った。そのとき岡村昭彦が生きていたら、彼ならきっとやるはずだと思ったわけです。

私は岡村君と付き合い合つてすぐに仲良く語り合いましたけれども、喧嘩するときには真つ二つに割れるほど喧嘩する相手でした。そこでこの男と長く付き合うには、余計なこと言っちゃ駄目だ、と自分に言い聞かせました。

プライバシーの話には一切乗らない。岡村君が女性の話をしても私は聞かないふりをしていました。呼び名も私は彼のことを「アキ」だなんて、なれなれしい呼び方はせず、ずっと「岡村君」と呼んでいました。

そのかわり彼のわがままも許さなかった。だんだん打ち解けてきたら、横手の町外れの私の家へ午前六時頃突然来て「くたびれました。腹減った、奥さん飯(まんま)！」なんてね(笑)。飯がすぐ出てこないとむくれるのですが、私は「ダメだめだ」とプライベイトの関係では彼の我儘を許さなかった。

なぜ、岡村昭彦ならやれると思ったか。その理由が二つ。

一つは、彼は異常に正義感の強い男でした。偉い家柄の生まれでね、お父さんは海軍将校で、お母様はカトリックの敬虔な信者。私も家に行きましたけれど浜名湖畔の家で漁師の集会所をしたり子供を預かったりしていました。貧乏人の出でない権力階級に繋がる家柄の出身なのに、非常に正義感が強かったですね。

そもそも岡村昭彦と私がなぜ仲良くなったのかというと、私が毎日新聞から頼まれて『南ヴェトナム戦争従軍記』の書評を書いたことからです。私は新聞記者の仕事をやりながら、当時、書評を書くというのが楽しみでしたなあ。とても勉強になったけど、相手が命がけで書いた著作ですから、いい加減な批評は書けません。自分に鞭うちながら厳しくやりました。だからあまり褒めた本はないのです。でも「むのさんによつとも褒められた書評が載ると、その本が売

れる」と言っただけ、出版社側は喜んでいました。

そういうときに、本当に興奮して読んだのが岡村君の『南ヴェトナム戦争従軍記』で、私はその本をべた褒めに褒めました。ただちよびつと一カ所、指摘したところがあつたのです。

当時彼は、ベトナムの民衆の思いを抱きながら、アメリカ軍に従軍してアメリカ側から取材しておったわけです。すると普段、語り合っている将兵が口になっているような言葉遣いや発音があつたせいでしょう。岩波新書の『従軍記』の中で彼らのことをベトナムと書いたのです。そこを私が「大きな輝く玉に小さな傷」と書評で指摘しました。

その書評を読んだ北海道新聞論説委員がサイゴン支局に転任になった。彼は岡村君の友達だつたので、「こういう書評が載っているよ」と岡村君に知らせたのです。

岡村君は私に褒められたことを喜ぶ以上に、その傷を指摘されたことに物凄いショックを受けたそうです。ベトナムははじめアジアの民衆の解放を思つて取材を続けている自分が、アメリカの側から従軍しておつたのが間違ひだったというので、恐らく無我夢中で北ベトナムのベトナム共産党へ飛び込んでいったのでしよう。

しかし、当時の日本人は第二次世界大戦以来、世界中から軽蔑され、信用できないエコノミッ

ク・アニマルと見られていた。岡村さんはすぐ収容所入れられ、活動の自由を封じられますが、しかし岡村昭彦はそういう人間でないと、北ベトナム共産党もすぐ理解しましたから、いろんな便宜を与えて、勉強させてくれた。それが二冊目の『続・南ヴェトナム戦争従軍記』ですね。これが翌年の一九六六年に出るわけです。

私は、ジャーナリストとして、歴史を学んできたものとして、あの岩波書店から出た、岡村昭彦の正・続二冊の『南ヴェトナム戦争従軍記』の中で、明らかに歴史的価値がある、読んだら勉強になる、その値打ちの高さは後からの方がずっと高いと思いますね。

ところがそれがさっぱり売れないということを知ったので、実際にどれだけ売れたのか、あるとき岩波の課長さんか部長さんが私の講演会に来ていたので「岡村君のあの本何冊売れましたか？」と聞いたんです。そしたら「それは企業秘密で教えるわけにはいきません」と言うんです。「でも、むのさんには断るわけにはいかないから、ちよつと待っていてください」と言つて調べてくれて、『正』の方は五十五万何千何十何冊、『続』は、二十五万何千何十何冊と細かい数字まで教えてくれました。

私から見れば『続』が、はるかに日本の民衆に歴史とは何か。それを見るにはどこに気をつ

けなければいかんか。歴史はどこへ向かつて動きつつあるのか。同じ過ちを繰り返さないためには、何をどうしなきゃいかんかを教えていると思えますよ。

こういうこともあと言ふ機会もないだろうから、少し付け足しておく、なぜ岩波の課長さんか、部長さんが「むのさんには断るわけにいかない」といつて、企業秘密まで教えたのか。それは私が岩波に一度恩を残したことがあるのです。

中国の文学者魯迅の全集を岩波書店が出すことを計画した時、魯迅が日本の一部の進歩的な学者や学生には信望されているけれど、一般大衆にはあまり知られておりませんでした。そこで岩波は全集を出すにあたって、いったい何人が買ってくれるか、発行部数を決めかねていたので。「むのさんは魯迅を師匠と仰いでいるそうだけでも、いま魯迅全集を出したときに、どれだけ売れると思いますか」と岩波に聞かれたので私は「二万冊売れる」と言つたんです。

普通、日本で全集を出す時、一巻目が百万部売れたとすると、二巻が七十万、五巻が三十万と、最後の方がどんどん痩せ細っていくんです。魯迅の場合は、最初から最後まで二万冊売れると私が言つたら、実際がその通りだったそうで、それでむのたけじは秋田県の片田舎でちよつぽけ

な新聞出ししているけれど、大した感覚だと、私を見直してくれたのだそです。

私に言わせれば、一九六〇年代の日本、あの頃には、言葉のまともな意味において、文化人、知識人と言われる人間が一億一千万ぐらいの人口の中で、まだ二万人は生きていると思っただけです。文化人、知識人は自分たちに直接の關係のない物書きが書いた本であつても、これは歴史の資料として、見なきゃいかんと思えば、必ず買う。それが二万人は居ると思つたんです。今は二万人いないよ。本当に減つたよ。

でも出版関係の方がいるなら聞いてください。本はこれから売れると思うよ。売れなきゃ日本潰れるもの。今まともに本を読もうとする人が少し増えてきているね。その証拠に大都市に大きな本屋が出来て、流行っているでしょ。少しいの方に向かっている。

けれども、岡村さんの本にしても、俺の本にしても常に五〇万部売れば、日本は少し賢くなると思うけれども、残念ながらこちらと結びあう知識人、文化人がやせ細っているのです。

今、マスコミでは若者をよく言いませんが、私はあそこにこそ、過去の日本にはない希望を持った人間たちが、次々と生まれてくると思いますよ。

横手に住んでいて、文部省がゆとり教育をやれといったおかげで、中学校、高等学校の生徒たちに話してくれと校長から頼まれて子供たちと語り合つて来ました。すると私の話が面白いというので、放送局や新聞社の連中が取材に来ました。その記事の中に、これは俺の宝物だと思つて切りぬいて、机の上に貼つてあるものがあるんです。

「年齢差八〇、同じ瞳の輝き」（笑い）という記事で、朝日新聞、秋田版です。私が九四歳のとき相手は一四歳の中学の女生徒。八〇の年齢差がありながらも、同じ瞳の輝きでぶつかりあつている、と。なんでそうなるのか、私にはわからない。けれど中学生の方で答えています。「今日、初めてむのさんにお会いして、生まれて初めての経験をした」と。へえ、何が？「視線が違う。こんなの初めて」だつて。

「これまで一四年間生きてきたけど、隣近所の大人たちは、『私たちは社会人、お前たちは子供だ』というような、斜めから突き刺さるような視線がこつち来る。産んでくれた親父やおふくろは、『俺たちは親だ。お前たちは子供だ』。学校の先生は『僕たちは教育者だ、お前たちは生徒だ』と同じ平面の視線がこつちに来ない。ところがむのさんの視線は私たちに真直ぐに来る」つていうんですよ。

考えて御覧なさい、あなた。かつての太平洋戦争をやつた爺婆ども、当時の大人が本当に涙をこぼしてお詫びしなきゃならないようなことを今の子供たちはきつちり体のなかに持つていきますよ。悪いことしたら謝らなきゃいかん、直さなきゃいかん。それを無理押しすればとんでもないことになる。われわれ馬鹿親父どもは日本が負けそうになれば元寇の役で船がつぶれたように、また神風が吹くとしゃべりあつておつたな。今の子供たちは自分の目で見えるもの以外は信用しませんよ。

それなのに、いまなぜ、その子供らが、いじめなどで友達を自殺に追い込んだりするのか。それは九九%まで、親父やおふくろ、大人の側の責任ですよ。いまの小学生、中学生、高校生にとつて、誰が信用できるのか。同年代の者です。その同年代のものを傷つけることが出来ますか。だから原因は親父おふくろ、大人どもにあると思うんです。

所得の格差、貧乏人とゆとりのある者の差が大きくなつていく。大人どものなかに、社会上の地位、立場について格差が生まれている。それが、子供の中に影響していく。

今は子供たちの自殺の二回目のピークがやってきているようですが、一回目が起こったとき、朝日新聞がこれは大変だといふので、いじめ防

止の単行本を作った。私のところにも書けとい  
つてきたから、書いた。

「だけど、私は言った。「あまり騒ぐな」と。  
いじめられて、自殺する子供が出たからといっ  
て世の親たち、大人どもは性根を入れ替えない。  
学校の状態も改まらない。先生も変わらないと  
分れば子供たちは自殺をやらないよ、そう言っ  
たらまもなく俺の発言通り全国で八人目のいじ  
め自殺者が出て以来ずっとなかったんですよ。

「今度出てきたのは何か。今見れば分るじゃな  
いの。自動車とか、電気とか、そういう儲けた  
ところは儲けを日本まで持ってくれば税金がか  
かるからと海外のどこかにプールしてるでしょ。  
そのおすそわけに労働組合の賃上げ要求に応じ  
た。大企業が安くて二千元、六千元、八千元、  
一万円上げた。中小企業はどうなったのか。賃  
上げに応じたのはわずか二割。しかも金額は二  
〇〇円から六〇〇円ですよ。」

この格差が親の中に歪みを産み、それが流れ  
流れて子供たちにああいう歪みを誘発している  
っていうことですよ。それをマスコミも、学校  
の先生も、教育専門家の連中も子供の側に立っ  
て見ないからわからない。今度、国民投票を二  
〇歳から一八歳にして政権に有利にしようとし  
ていますが、効果は逆で、日本の平和を守るた  
めにプラスになるということを私は確信してい

ます。

「あら、岡村昭彦がどこかへいっちゃった。岡  
村昭彦君の話に戻します。彼には潔癖な気持ち  
があった。だから彼はアルカイダのビン・ラディ  
ンのところへ会いに行つて「あなたがたはこう  
いうことをやっているって本当なの？ 目的は  
何なの？ もし本当にやっているとしたら、ど  
うすればやめるの？」と尋ねるでしょう。「あ  
なたがたに身の覚えのないことだとすれば、な  
ぜこういうことになったの。聞くところによれ  
ば、ビン・ラディンさんよ、あなたのお父さん  
をニューヨークに連れて来て、社会活動させた  
のはブッシュ大統領の親父だそうですね。する  
とあなた方一家とブッシュ親子とはどういう関  
係ですか」と聞けるじゃないの。」

「私はそれを潔癖な岡村君ならやると思った。  
私から指摘された一点のことを気にして、言い  
訳せずに、無謀と思われる北ベトナム共産党に  
飛び込んでいって、行動で自分の過ちを直そう  
とする。そういう潔癖なものが岡村君の魂のな  
かにはあるから。」

「彼は、私に勧められて、ビン・ラディンに会い  
に行く仕事をやるというだろう。どうする？  
俺はもう年だから駄目だけど、君一人でも駄目  
だろう。そうだなあ。三〇代、四〇代、五〇代  
の男のジャーナリスト一人ずつと、四〇代、五

〇代の女性ジャーナリスト一人ずつ計五人ぐら  
いを付けて、金、何ぼ掛かるかなあ。ビン・ラデ  
インに会いに行くまでの関所が六つぐらいある  
なあ。一か所に賄賂が五億円じゃ無理じゃない  
か。六億か、七億かなあ。上に行く度に高くな  
るぞ。五番目まで行けるなら、最後のビン・ラデ  
インに会うのは六番目あたりだろ。これが大変  
だなあ。どうやってやるか、というようなこと  
を、私は岡村君と喋つただろうと思います。  
彼はそれに飛びつくと思います。だって彼は  
私に対して、失礼なことをしたことがある。」

「あるとき、数日講演で歩いて家へ帰つたら、  
私の妻が、ブンブン怒っているんです。「あな  
た友達持つなら選びなさい」って（笑い）。「昭  
彦の何なの」と怒っているんです。どうしたの  
と聞くと、昭彦くんが来て、南北ベトナム戦争  
が終わりに近づいたので、私はアメリカ軍の側  
に付くので、むのさんが北ベトナム共産党の了  
解へて北ベトナムの側に。両方がぶつかるとき、  
日本のジャーナリスト二人がそこでパタツと出  
会う。そういう話を持って来たのよ、って。」

「聞くとお金はなんとか都合できそうなこと言  
つたという。うちの妻はそれこそ子供の遊びじ  
やないんだから、それは違うんじゃないかと。」

結局、最後にはアメリカ海兵隊二万がベトナ

ム農民に囲まれて、アメリカ大統領はこれを見殺しにするかどうかとなったときに、アメリカは二万人の海兵隊員を一日か、一日半で一気にアメリカへ引き上げました。惨敗でしたね。

岡村君が私に何回も言ったのは、「日本人はアメリカのことを知らない。アメリカというと日本人はリンカーンのことだったり星条旗だったりするけど、アメリカ人の一番の誇りは海兵隊だよ。海兵隊が出来てから戦って一度も負けなかったことがない。海兵隊という英語がアメリカの国歌と同じ誇りを持っている。その海兵隊がベトナムの農民兵に傷つけられたとなれば、それだけアメリカは傷つけられる。

ベトナム農民がアメリカ人によって攻められれば攻められるだけ、破壊力の高いアメリカの武器を戦場から拾って武装して、ついにはアメリカと対等になって、海兵隊を籠の中に入れる力を発揮した、こういうところが分からないということをお話していました。

南北のジャーナリストが握手だなんてつまらないと妻は怒っていたのですが、そんなことを考える男だけに「岡村君よ、ビン・ラディンに本音のインタビューをどこの国もやらないから俺たちでやろう、五〇億か六〇億の金なんかどっかで工面してやろう」と言えば、夢みたいなことでも、彼なら飛び付いてくると思うし、岡

村君にはそういうとき他の日本人には出せないエネルギーを出すものを持っていましたな。

私は高校生や大学生に講演する時に必ず岡村君の『南ヴェトナム戦争従軍記』の中の言葉を紹介します。それはご存知の「同情は連帯を拒否したときに生まれる」という一節です。

彼はベトナム戦争に従軍して、いろんな国際救助活動とか何とか、いろんな光景をみてわかつたんだ。同情は美德、人間としては、人と人とが労わり合い、慰め合うことは大変なエネルギーだと褒めてるけど、それは違う、と。

同情するときのこちらの気持ちはどうかというと「ああ、可哀そうだな、気の毒だな、助けてやろう」と、自分はどんなときでもこのような惨めな状態にはならないと思ったときに、人は「おお、可哀そうに」と安心して涙こぼす。相手と自分は違うというときに、一つにとけあつたような涙や言葉を出す。これを岡村君はあの本に書いている。

この一節が日本の高校生たちに大ショックを与えましたね。講演ではベトナムのことより、そのことの方が大きな波紋を起こしました。

有楽町にあった旧朝日新聞社で、社会福祉関係者六五〇人が集まった講演会で、私はこのことを言った。「同情では駄目だ！ 連帯でなければ駄目だ！」そう言ったら会場が真っ二つに

割れた。「何言うかてめえ！ 秋田の爺！ 綺麗事言うな！ 同情でもなんでもいいんだ！ 飯食えない奴には食わせればいいんだ！ 寝る場所の無い奴は寝るところを与えればいいんだ！」と。それで私は「あなたはどなたですか」といったら、東京都社会福祉課の、ようするに泊まる金もなくて働いている労働者の世話をしている組織の親分なんです。

「ああそうですか、それも一つの考えでしょうね」と私が言ったら、そしたらどうなったかというと、「同情は間違いだ！ 同情を克服しなきゃいけない！ 真実の人と人との繋がりは、むのさんの言った通りだ！」って、怒った人たちがいた。誰だと思いません、カトリックの方たちでした。四〇人ぐらいで来ておられた。それが一斉に立ちあがって、俺をのけて廊下でやり合っているんです（笑い）。

これ程、破壊力を持つ、そういう言葉が岡村君の本の中にはあるんですよ。そういうものを彼は持っている。そういう力を私、発揮するんじゃないかと思うんですよ。

オバマ大統領の放った特別の刺客が証拠隠滅のためにビン・ラディンを殺した。刺客はビルディングの窓から室内に入るそうです。軽い飛行機で四人の刺客がビン・ラディンと二人の娘

と奥さん、それ以外に武装した人が誰もいない部屋へ飛びこんで行って、ビン・ラディンを殺害したのです。

もしかして岡村君が居たら、救えたんじゃないのかなあ、やれたはずなのになあ、ああ、残念だ。そういう意味で残念だなあ。なに、俺よりも遅く生まれて、早く死んだのか。ビン・ラディンが生きているうちに彼の証言を引き出したかった。

いずれにしてもこのままでは情けない。エコノミックスの代わりにアベノミックスだなんて、なんなのあれ。一方では積極的平和主義とか言っていて、積極的軍国主義へとつとと帰ろうとしている。こういう総理大臣を支持しますというのが七三%。なんだろう日本人って。これで死んだ三百何十万の人にどう言って詫びるんだ。あまりにも馬鹿臭くなってねえか！ ええ！ 本当に情けねえ。

岡村君が生きていたら、何ていうでしょうかね。『1968』という本を、三省堂で出しました。あの本は優れたいい本だと思いますよ。各大学の歴史学者にも評価が高かった。それは何か。二人で歴史がどういうふうに進んでいくかを学び取る力を、自らが身につけるにはどうすればよいかを一緒に考えようという本だ。大変でしたよ。喧嘩しちゃってね、俺と岡村昭彦。

もう駄目だというとき、三省堂が仲良くさせようとした（笑）。そして毎年これをやって『1969』もやった。御茶の水の近くの宿屋を借りて、十日もやったら命が縮まるので、やめちやった。

それはなにか。いま、日本人にいま一番欠けているものは、いろいろ起きてくる出来事が、どこでどう繋がり、どうなるかということを民衆の目で見分ける力です。それは何も立派な学問やらなくなつて、生活の感覚でわかるはずですよ。本当は。それを身につけるようにしようじゃありませんか。

私はここ数年で三冊、岩波新書から出しました。結局言いたいことの一つは、困ったとき誰かに助けてもらおうというのは全然駄目ですよ。つてこと。自分のことは自分で始末しなきゃいかんのだと、それを言いたいわけですよ。そのためにはどうするのか。やっぱ人間ですからね。結局、人間に戻るしかない。俺は人間の一人だ。人間だからこれを、やらなきゃいかんな、人間だからこれはやってはならないな、と自分で自分に問うしかない。

それを、七二億の一人ひとりが、他人に頼むんじゃないで、自分で、自分が考えてそれを自分の朝昼晩の生活の中で、こうやらなきゃいかんということを少しずつやればいい。やっては

ならないということをやらない。それだけのことなんです。

人類が過去、これまで、七〇〇万年の間に神様、仏様、英雄、偉人、天才。そういう人をお願いすることは山ほどあったけど、一つも願いは叶わなかった。ご覧のとおり。

地球の温暖化の問題にしても、一方では太陽の黒点の変動から、七〇年にわたって地球全体が凍り付く危機が言われる。何千万発、何万発あるかわからない原子爆弾が飛び交ったら人類は滅びるといふ、その危険の上に我々は毎日寝てるわけですよ。それをポカーンとしているこの現状ね。

そういうことを考えるとつい大きな声を出してしまうんです。岩波新書の中見出しに「人類の余命は四〇億年か四〇年か」と入れさせてもらったのですが、もう私は本当にあと四〇年で人類は滅亡することを覚悟するところへ進むか、助かって地球の長さだけ他の動植物と一緒に食ったり食われたりしながら生きていけるかの、大事ないま境目に来ていると思っているんですよ。本当に。

そして、一番金がかからずに、一番早くやれるのはここに八五人いたら、できれば八五人、できなければ八五人の中の七五人でも、六五人でもいい。生活の中の主体として自分自身が、

社会人として、家庭人として、一個の男として女として、やっていいこと、やって悪いこと、その声を聴きながら、それに忠実に生きる。それを毎日やっていく。国家予算をつぎ込むこともいらない。国際会議もいらない。これほど手っ取り早くて安上がりはないぞと言うんです。

私の考えでは、そういうムードが、世界の人間のいるすべてのところから、ぼつぼつ出てくれば半年、一年で地球の空気の味が変わってくると思うよ。長い時間をかけないで効果が現れる。人間というのは不思議なもので、やることが効果あるとわかれば、自分で自分を励ますようになるもんな。そうすれば、力が出てくる。

だから、今度の三冊目の『99歳一日一言』の冒頭に、「拝むなら自分を拝め。賽銭出すなら自分に渡せ」と書いている(笑い)。そうでしょ。正月三が日、明治神宮へ、三二〇万人が行って、五百円、千円の賽銭をご神体にぶんなげて、お前に銭やるから願い叶えろ(笑い)、なんて無礼を働いて、願いの叶った人いますか。一人もないよ。儲けたのは、お賽銭集めた神社事務局だけです。そんな馬鹿をいつまで繰り返すのかって言いたいんです。ま、岡村君が生きていれば、そういうことしゃべったね。

彼にはそういう閃きがありましたな。優しいところもあった。まあ、その一つというと、むのさ

んは心配だなという。なしてというのと、必ずあったはいつか裁判所で法廷に立たされる(笑い)。法廷ってところはいかにも厳かなふりをして、裁判官が威張るようになってる。あなたはクソ真面目だから、それに引きずり込まれるな。僕の勧めること覚えてて、法廷で判事がお茶飲んだら「ハイ。私も同じ人間だ。俺にもお茶飲ませろ」ってすぐ言いなさい(笑い)。そういうことまで言ってるね、私を小馬鹿にしたようにしながら(笑い)、気を遣うところがあつた。

私が青山齋場で怒つたのは、私の家に来て、何度か言つたんだ。ベトナム戦争でほとほと神経疲れてしまった。けれども一つわかる。戦場では砲弾が飛んでくるけれども、慣れてくると、大体どの方角だ、どこへ落ちるかがわかるようになるんだ。だから、ちよつと体を五メートル、十メートル動かすだけで、当たる弾にも当たらないですむ、とね。

ところが、前の晩に酒を飲んだり、麻雀をやつたりして戦場へ来れば、それが利かなくなる。やっぱり戦場で怪我するジャーナリストには、それなりの心配りの行き届かない面があるんだ。自分はそうなりたくないと思つて頑張ってるんですよと言つてね、殊勝な小学生のような顔をして、砲弾がこうくればこうと身振りを交えて喋つておつたね、その彼があつという間に死ん

じやつたもんね。なんでだ、昭彦君。今、あなたは生きてなきやならなかった。

しかし昭彦君が生きていなければならなかった分、こうしてお集まりのみなさん、どうか彼の志を引き継いで、あの世の岡村君と手をとりながら励ましあいながら、日本社会の中に希望の光が強まるように、それぞれの場で、それぞれのお仕事で、これまで以上に心を込めて頑張つていただきたいと私からお願ひいたします。

#### 【略歴】

一九一五年一月二日秋田県生まれ。日本のジャーナリスト。旧制県立横手中学校から東京外国語学校卒業。報知新聞記者を経て、一九四〇年朝日新聞社に入社、中国・東南アジア特派員となるが、敗戦を機に戦争責任を感じて退社。一九四八年秋田県横手市で週刊新聞「たいまつ」を創刊、反戦の立場から言論活動を続けた。一九七八年「たいまつ」は休刊。一〇〇歳を目前にして現在も自ら体験した戦前・戦中の表現の自由、言論統制を振り返りつつ、憲法改正の議論、特定秘密保護法などに対してジャーナリストの立場から意見を述べている。著書には『詞集たいまつ』(評論社)、岡村昭彦との対談『一九〇八年 歩み出すための素材』(三省堂新書)など。近著『希望は絶望のと真ん中に』(2011/8/20)『99歳一日一言』(2013/11/22)いずれも岩波新書。

# 事務局からのお知らせ

## 1. 岡村昭彦の写真展「生きる」と死ぬ「と」のすべて

7月19日(土)～9月23日(祭) 於東京都写真美術館



## 2. 「写真展・シンポジウムのお知らせ」

- 2014年度「生と死を考える会」全国協議会豊橋大会  
10月25日(土)～26日(日) 会場 穂の国とよはし芸術劇場  
(主催 豊橋ホスピスを考える会 電話 0532-62-3889)
- ① 岡村昭彦写真展&岡村文庫資料展
- ② シンポジウム 10月26日(日)午前9:30～12:00「ホスピスと「ミッション」(使命)―岡村昭彦が遺したメッセージに込められた」
- ③ 細野容子「ホスピスの母マザー・エイケンヘッド―アイルランド紀行」
- ④ 米沢慧「岡村ゼミ―看護婦と作った『入院案内』が問いかけるもの」

## 3. 岡村昭彦関連著書案内

- 細野容子監修『ホスピスの母 マザー・エイケンヘッド』  
1部 ジュニアル・S・ブレイク「マザー・エイケンヘッドの生涯」浅田仁子訳  
1部 解説・資料編
- 「ホスピスというミッション」―米沢慧 細野容子「21世紀のコークからの報告」19世紀のダブリンからの報告―岡村昭彦 関連年表)
- 春秋社刊 定価二五〇〇円(税別)6月20日発売予定  
\*この本の申込はAKIHIKOの会でも受付ます。
- 隈崎行輝『ぼくが旅したホスピス』木星舎 6月10日発売予定

## 4. 「シャッター以前」6号 原稿募集

- 没後三〇周年、写真展記念号。15年3月刊行予定。
- \*テーマ 岡村昭彦に関するエッセイ・論(2000字～4000字程度)、岡村資料の発掘、写真展の感想等歓迎(稿料無料)。\*原稿締切:15年1月10日。

## 5. 「没後のアキヒト・オカムラ」資料編

- 2013年
- 1. 「GRAPHICATION」No.184 のちを受けとめる磁場 米沢慧
- 2. 22 岩波書店『思想のつづき「医学概論」―』

- のち「つづき命のか」高草木光一編
- 3. 「GRAPHICATION」No.185 ●特集 岡村昭彦が残したもの

- 対談 岡村昭彦―ことばの写真家をめぐって 中川道夫・米沢慧 ●「岡村昭彦の写真展」の開催について 金子隆一 ●「我々はどんな時代に生きているのか」との問い 吉田敏浩 ●「岡村昭彦文庫をめぐる証言」 比留間洋一
- 「岡村昭彦のアイルランド」 戸田昌子 ●アイルランド未発表写真から 岡村昭彦
- 4. 「HOC」6月号 vol.67(ふらんとまがじん社) 函館特集・十字街・銀座通り 栄文堂書店
- 6. 11 講談社「アイウィットネス 時代を目撃したカメラマン」平敷安常
- 12. 21 日本経済新聞交遊抄「幸せにする詩人」中川道夫

## 2014年

- 3. 30 北海道新聞 函館ゆかりのジャーナリスト岡村昭彦氏のび90人が東京に集う
- 4. 19 北海道新聞「やまがら日誌」岡村昭彦氏の問い掛け
- \*ホームページ「没後のオカムラアキヒト」更新済
- 『岡村昭彦の会会報』第24号(2014.6.14) 発行 東京都江戸川区西小岩五十一―二十七 戸田徹男方「岡村昭彦の会」事務局  
TEL&FAX 03-3667-0300  
03-3667-0300  
口座番号「00170-0-015119」  
加入者名 「岡村昭彦の会」  
\*メールアドレス akihiko-no-kai@kazekusajp